

XIII 総合看護研究施設

1 位置づけ

本研究施設は、1991年4月1日に設立された。設立の目的は、建学の精神に則り、看護の分野に関連する諸科学を科学的、技術的、総合的に研究し、看護の発展に寄与と貢献することである。

2 組織

構 成 員	
所 長	望月 好子（教授）
所 員	山口 由子（教授）、久保 典子（准教授）、阿部 ケエ子（准教授） 大貫 美奈子（講師）、高本 征子（助教）、井上 茂夫（事務室係長）

《役割分担》

総合看護研究施設 活動		担当者
公開講座	公開講座A	◎阿部・山口・望月
	公開講座B	◎大貫・高本・望月
研究支援	学外研究支援	◎阿部・山口・望月
	プロジェクト研究（学内研究支援）	◎望月・久保・山口
	共に学ぶ会（学内研究支援）	◎久保・山口・望月
論文集	論文集 編集委員会	◎望月・久保・山口
物品管理	機器・備品管理・施設整備・消耗品管理・議事録整理	◎高本・大貫・望月
事務	各種発送・配信、問合せ等の対応、公文書および鏡文作成・発送等、対外対応、論文集印刷依頼・施設等への発送等、事務処理関係 講師謝金、受講料の出入金に関する事務処理関係 申込み者一覧表の作成など、各種活動の応募者に関わる情報整理	井上
総括	予算・総括	望月

3 施設概況

総合看護研究施設（15研）があり、総延べ面積は、施設面積約30m²である。主な設備は、コンピュータ（ノート型、インターネット利用可能）2台、カラーレーザープリンター1台、複合機プリンター1台、プロジェクタ2台、デジタルカメラ2台、ラミネーター1台、ビデオカメラ2台、ビデオカメラ用三脚2台、高速スキャン1台、書画カメラ（実物投影機）1台・取り付け型電子黒板ユニット1セット、60型スクリーン1台である。図書・雑誌等は、図書館と連携し、図書館所蔵資料を活用している。

4 活動目標

この施設の目的は、本学の建学の精神にのっとり、看護の分野に関連する諸問題を科学的、技術的、総合的に研究し、看護の発展に寄与することである。（東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設規定 第2条より）活動目標としては以下の内容があげられる。

- 1) 本学教員の看護研究活動推進に向け教員相互の研究的交流を支援する。
- 2) 本学の発展に向け本学教員が取り組むプロジェクト研究を支援する。
- 3) 臨床看護の充実・研究活動の推進に向けて地域の看護職を対象とした研究支援活動を実施する。
- 4) 地域発展への社会貢献として住民の健康支援活動を実施する。
- 5) 看護学教育および臨床看護の充実に向け本学教員の産出した研究成果を公表する機会として論文集を発刊する。
- 6) 所員相互の連携を図り、目標達成に向け本学教職員の協力を得ながら活動を推進する。
- 7) 活動内容を評価し、その成果・改善点を次年度の運営に役立つよう活動報告としてまとめる。

5 活動概要

次に、活動目標に沿って、主な実施概要を示す。

1) 本学教員の看護研究活動推進に向け教員相互の研究的交流を支援する。

看護研究を支援する活動（本学教員対象）「研究交流会」を実施した。

研究交流会の日程および時間の設定は、原則総合看護研究施設所員会議のある日の夕方とし、1回1時間程度で会を開催した。会の対象者は学内教員であり、参加は任意であるが、開催日の1週間前に会の日時、発表者、テーマについて掲示とメールにて全教員に周知させた。各回の教員の出席は10名前後であった。テーマの設定については、今年度はMSシートに位置付けられている「研究活動を活性化させる」という役割をふまえて、年間の活動も一貫性のあるものになるよう内容を検討した。開催回数については、年間5回を目安にしていたが、他の委員会の研修会・講演会も増えており、日程調整が難しく、4回となった。しかし、内容は充実させられるよう配慮した。結果、第1回は倫理委員会との共同企画で、日頃の教育活動を研究にする際の、倫理的配慮の最新情報を得ることができた。また、第2回では科研費獲得のための有用な情報を得る機会を設けることができた。さらに第3回、4回では研究・教育に有益な最新ツールについて、学内の教員間で活発に情報交換を行うことができた。

回	開催日	時間	発表者	テーマ
1	7月11日	10:00 ～12:00	三上 礼子先生： 医学部医学科基盤 診療学系	学内の倫理委員会との共同企画 「教育活動を研究にする場合の倫理的配慮について」
2	9月25日	17:00 ～18:00	河端 恭太氏： 伊勢原研究支援課 職員	「科研費申請初心者向け説明会」
3	11月26日	17:00 ～18:00	情報交換会のため 特に設定なし	「自分たちの研究・教育に有益なツールやノウハウをシェアする」
4	2月10日	17:00 ～18:00	総合看護研究施設 望月 好子 所長	「i-pad や i-movie を使って、音声入りの動画教材を作ろう」

2) 本学の発展に向け本学教員が取り組むプロジェクト研究を支援する。

総合看護研究施設プロジェクト研究は 2008 年度より以下の取り決めをもって運営している。

プロジェクト研究で取り組む研究課題のタイプ

1. 本学において特に力を入れている取り組みについての課題
2. 近年の情勢から考え特に取り上げる必要のある課題
3. 日常的に活動している専門領域あるいは委員会として取り組んでいる課題
4. その他

プロジェクト研究の構成メンバー

1. プロジェクトは研究代表者を定める。研究代表者は研究成果のとりまとめを含め、研究計画の遂行に関してすべての責任を持つ。
2. 研究代表者は本学教員であること。
3. 構成人数は、代表者を含め原則として 3 名以上とし、学外より研究分担者を加えても良い。ただし、その人数は学内の教員数を超えないこと。

個人（少人数）研究の構成メンバー

1. 個人研究の場合は、申請者が研究代表者として研究計画の遂行に関してすべての責任を持つ。
2. 少人数研究（2 名以下での研究）の場合は、研究代表者は本学教員であること。共同研究者は、他施設の者でも可とする

研究助成期間

1. 研究期間は 2 年間を限度とする。
2. 研究助成金は初年度のみ申請とする。

研究報告

1. 研究期間終了年度には研究成果の報告を行う。掲載誌は本研究所論文集を原則とするが、他の学会、学術雑誌等への投稿も認める。その場合には、他誌に掲載の旨を所定の様式 1 を用いて本施設所長に報告する。
2. 研究期間の途上にあつては、所定の様式 2 をもって年度末に研究経過を本施設所長に報告する。

注) 下線は、2015 年度追加事項

上記規程に基づき、プロジェクト研究申請が行われ、今年度は継続 1 題、新規 4 題が採択された。また、前年度までに助成した研究課題については、国内学会および本施設論文集への掲載により研究成果の公表がなされている。詳細は以下の表のとおりである。

①2015 年度 研究課題と概要

番号	◎代表者 研究者	テーマ	概要および経過	研究申請 期間
15-01	◎中田 芳子 阿部 ケエ子 新村 直子 湊田 明子 千葉 美果	統合実習の評価	2015 年度は研究計画書について検討中。2016 年度には、本学の研究倫理申請に申請予定で、研究許可後に質問紙調査を東海付属 4 病院の新人対象に実施する予定です。	2015 年度 ～ 2016 年度
15-02	◎岩屋 裕美 山口 由子 久保 典子 千葉 美果 宮崎 素子	看護技術教育における動画教材作成とその学習効果	「看護技術教育における自作視聴覚教材作成とその学習成果」として、2015 年 7～8 月、データ収集 9～12 月分析および論文執筆 2016 年 1 月、総合看護研究施設論文集 25 号に掲載。 「看護技術習得における自己調整学習方略と看護技術習得度との関連」として、2015 年 7～8 月データ収集、2016 年 1 月データ収集、2 月～3 月分析、2016 年 5 月以降に看護または心理系学会にて発表予定。	2015 年度 ～ 2016 年度
15-03	◎千葉 美果 水元 明裕 森 悟子 岩屋 裕美 端山 淳子 松木 秀明	リスク感性与える教育と臨床経験の影響の考察 ～危険予知力とメタ認知尺度を用いて～	リスク感性はどのように育つのか、看護基礎教育をおこなう教育機関と臨床での経験をもとに検討することを目的とした研究を看護学生と臨床に勤務する看護師を対象に実施。 2015 年 9 月 25 日、東海大学医療技術短期大学の倫理審査の承認を受け（承認番号 15-07-02）調査を開始。研究対象者：東海大学医療技術短期大学看護学科在学中の学生、東海大学医学部付属病院勤務経験 1～5 年目の看護師。調査用紙配布および回収期間：2015 年 12 月 1 日～2015 年 12 月 15 日。現在、回収した調査用紙の集計中。2016 年度中に学会等での発表を行う予定で活動している。	2015 年度 ～ 2016 年度
15-04	◎高本 征子 折元 美雪 大堀 昇 中田 芳子	特定地域における住民の「望ましい死」の意識調査	2015 年 7 月より、先行研究レビューを実施。2015 年 9 月より研究計画書を高本が作成。今後、東海大学医療技術短期大学の倫理審査会へ申請をする予定である。	2015 年度 ～ 2016 年度
15-05	◎大貫 美奈子 樋口 貴子 永江 夏紀	精神看護学実習の支援環境の実態調査と検討	2015 年には、組織内の人員移動に伴い、構成員を変更した。まずは、研究内容を吟味し、現在の精神看護学実習における実習での学習効果や実習環境の実態調	2014 年度 ～ 2015 年度

		査から始める方向で検討中である。研究に取り組む環境の調整が少しずつ整ってきたこともあり、今後は研究の方向性を見極め、研究計画書を作成し、倫理審査への申請等に取り組む段階である。
--	--	--

②研究成果（論文・学会発表など）及び研究進捗状況（2015 年度までの助成研究）

テーマ	研究者	掲載誌・発表学会（開催地） [巻(号)、頁、年.月]	研究助成期間
看護技術教育における動画教材作成とその学習効果	◎岩屋 裕美 山口 由子 久保 典子 千葉 美果 宮崎 素子	総合看護研究施設論文集 25 号、 p3-16、2016. 3	2015 年度
中堅看護師の全体性としての「看護をする力」の発展 第 1 報～語られた看護実践の現われ～	◎吉田 礼子 内藤 三恵子 磯 みどり 端山 淳子	総合看護研究施設論文集 25 号、 p17-27、2016. 3	2014 年度
中堅看護師の全体性としての「看護する力」の発展 第 2 報～「看護をする力」の発展過程における“ナースの思い”～	◎内藤 三恵子 磯 みどり 吉田 礼子 端山 淳子	総合看護研究施設論文集 25 号、 p29-37、2016. 3	2014 年度
「内側を見ること」を支援する訪問看護実習指導の構造～訪問看護に必要な生活を洞察する力～	◎中田 芳子 新村 直子 後藤 雪絵	日本在宅看護学会誌、4 巻第 1 号 P86、2015. 11	2012 年度 ～ 2013 年度
看護職離職者が再就職を果たし継続している要因に関する研究	◎丹澤 洋子 千葉 美果 湊田 明子 堀口 ゆかり 文殊川 由美 飯沢 正美 今瀬 繁子	2014 年の 12 月に倫理審査を受け承認されたため、2 月より近隣の病院に順次研究依頼をし、8 月中旬よりインタビューを開始。最終的に 4 名の対象者を得た事でデータ収集を終えた。現在は、データのコード化を終了し、内容の分析と考察を行っている。2016 年度には学会と紀要での発表を予定している。	2013 年度 ～ 2014 年度
総合病院救急外来に勤務する看護師の精神障がい者に対する意識の実態調査	◎樋口 貴子 大貫 美奈子	当初研究テーマとしていた「総合病院救急外来に勤務する看護師の精神障がい者に対する意識の実態調査」では、研究対象が曖昧であることに加え、研究結果の一般化という部分で課題が残ることが予測されたため、2015 年に研究主題を「中小規模病院救急外来	2014 年度

		での、精神障がい者へのケアの質の向上にむけた課題の研究」とし、研究の内容や方法を検討。現在は、実態調査研究から文献レビューに変更し、取り組みを続けている。	
--	--	---	--

3) 臨床看護の充実・研究活動の推進に向けて地域の看護職を対象とした研究支援活動を実施する。また、今後の発展的な活動について検討する。

①看護研究を支援する活動

神奈川県内 100 床以上の病院および東海大学医学部附属 4 病院に勤務する看護職者を支援対象として支援希望者およびグループを募集した。今年度は、4 件の応募があり、うち 2 件が昨年度からの継続研究であった。この 4 件の研究を支援した。研究支援期間は、2015 年 7 月から 2016 年 2 月までであり、1 回 1 時間程度の面接指導を 4 回、本学総合看護研究施設において実施した。今年度は、初回指導時に 4 回の指導についての約束事などを合意してもらった事もあり、途中での支援中止などの問題は生じなかった。

②看護職者対象公開講座の実施

月日／会場	テーマ	参加者数	担当者
8 月 21 日 (金) / 東海大学 12 号館 3 階 305 コンピュータ室	看護研究に役立つエクセル講座 ー超初級者編ー 講師：望月 好子 先生 (本学 教授)	40 名	望月 好子、山口 由子、阿部 ケエ子、久保 典子、丹澤 洋子、大貫 美奈子、高本 征子、井上 茂夫 以上 8 名

アンケートでは、「活用方法の理解が深まった」「今後の活動に役立つ」が 90%以上であり、昨年度よりも「今後の活動に役立つ」という項目で上昇があった。また、「本講座に参加して良かった」「内容が分かりやすかった」が 90%であり、満足度も高かった。

昨年度、80%に満たなかった「内容が期待通りであった」という項目では、今年度 86%と上昇した。今年度は、昨年度の反省を活かし、講座の内容を分かりやすくして対象者を限定したためと考える。しかし、「演習時間は適切である」という項目は、70%代であった。自由記載においても、「演習時間を増やして欲しい」と 4 名の参加者が回答していたり、「早すぎてついていけなかった」という参加者もいたりした。今年度は、エクセルの超初級者を対象としたため、次年度以降、このような対象者とする場合は、内容の精選がもっと必要である。

エクセルの初級者編、中級者編、上級者編と段階的に企画して欲しいという意見が 3 件あった。

テーマについて、今後も検討が必要である。

4) 地域発展への社会貢献として住民の健康支援活動を実施する。また、今後の発展的な活動について検討する。

月日／会場	テーマ	参加者数	担当者
10月10日(土)／ 東海大学医療技術 短期大学講堂	脳と健康 ～元気に暮らそう！～ 講演「認知症とはどんな病気？」 講師：灰田 宗孝 先生 (本学 学長・教授)	67名	望月 好子、山口 由子 阿部 ケエ子、久保 典子、 大貫 美奈子、高本 征子、 端山 淳子、春田 典子 樋口 貴子、井上 茂夫 以上 10名

当日は、67名(申込79名)の参加であった。また、「申込はしていないができれば参加させてほしい」と直接来校された方も数名いた。今年度も実施後のアンケートを参加者に依頼し、回収数66枚(回収率98%)であった。参加者の年代は、50歳代以上が85%を占めていた。また、参加者の42%がリピーターであり、22%が3回目以上の参加であった。講座の感想としては、「勉強になった」「わかりやすく、ユーモアがあり、すばらしい公開講座でした。」「有意義であった。」など、講師への賞賛、感謝を含め、肯定的な意見が多くあった。今年度は、講師に講座の内容をわかりやすく、ゆっくりとお話しいただき充実した学習時間を提供することを重視し、体験学習をする時間を設けなかったが、要望の中には「話の途中で手遊びもあった方がよい。」「どう運動をすればよいか等を教えてほしい。」等の意見もあった。

今後に向けての要望として、「年1回だけでなく、回数がもう少し多いと嬉しいです。」「同じ話でも何度も聞きたいです。」「家族の対応の講座もお願いしたいです。」等の意見があった。全体的には、参加者の満足度も高く、98.4%の参加者が参加してよかったと評価しているため、地域住民の健康促進への活動として貢献できたと考える。

会場の設営については、前年度までの意見を踏まえ、トイレのわかりやすい表示方法の工夫、高齢参加者への配慮を考えたスタッフの対応等、参加者の目線を意識して対応することに努めた。参加者からもスタッフの対応への賞賛、感謝の感想が多く寄せられていたため、概ね気配りや配慮が適切に行っていたと評価できる。

次回への課題として、PR活動方法の中の近隣地区自治会(下大槻地区、北矢名地区、金目地区、鶴巻地区の自治会)に依頼していた回覧版用チラシの配布に関して、各自治会長の負担となっている部分もあり、また、参加のきっかけとなった広報の67.1%が市の広報誌であったこともあり、次年度は近隣3市(平塚市・秦野市・伊勢原市)の広報誌掲載と新たな市の開拓を行っていく方向で検討していくことが望ましいと考える。今年度の広報誌掲載は、9月30日の募集締め切り3～4日前の掲載となったが、週末であったこともあり、募集締め切り直前の申込が多くあった。余裕をもって広報誌に掲載できればよいが、掲載日の指定は出来ないこと等もあり、その点を考慮しながら広報活動を行っていくことが望ましいと考える。

5) 看護学教育および臨床看護の充実に向け本学教員の産出した研究成果を公表する機会として論文集を発刊する。

2016年3月31日、「東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集 第25号 2015年度」を発行した。論文3題、その他1題、計4題が投稿受理され、発刊の運びとなった。

今年度は、論文集の投稿規程の検討後に主に「投稿者(筆頭者)の資格」についての修正を行った。本論文集作成にあたっては、例年通り、年度初めに論文集発刊計画についてのタイムスケジュールを作成し、教員にメール連絡および掲示を行った。年度末発刊に向けては、非常にタイトなスケジ

ジュールであるが、投稿者および査読者の協力が得られスムーズな編集ができた。今後も、編集スケジュールを綿密に計画立案し、投稿者の協力を得て進めていく。

印刷については、昨年度に引き続き民間業者に委託することにした。業者の協力により年度末予算執行することができた。

6) 所員相互の連携を図り、目標達成に向け本学教職員の協力を得ながら活動を推進する。

上記活動を遂行するにあたり、所員会議をもちスムーズな運営ができた。また、学内の全教員に何らかの活動への支援を要請し、協力を得ることができた。

7) 活動内容を評価し、その成果・改善点を次年度の運営に役立つよう活動報告としてまとめる。

2015 年度総合看護研究施設活動報告書としてまとめることができた。

6 委員会開催状況

回	開催日	議 題
1	4月9日(木)	① 報告事項 2014年度からの引き継ぎ事項について ② 総合看護研究施設規程による本委員会の位置づけの確認 ③ 今年度の方針、活動目標、年間活動計画、役割分担 ④ プロジェクト研究 応募条件の検討
2	4月23日(水)	① 2015年度 活動計画について(各担当より活動計画案) ② 2014年度 決算報告 ③ 会議日程の確認 ④ その他 プロジェクト研究 応募条件の検討
3	5月20日(水)	① 予算の配算について ② 各担当からの進捗状況報告 ③ 各活動支援教員について ④ 購入希望物品の把握について
4	8月10日(月)	① 各活動の進捗状況報告 ② 2016年度予算案について
公開講座A 実行委員会	8月20日(木)	8月21日(金) 公開講座A 会場準備と打ち合わせ
公開講座A 実行委員会	8月21日(金)	8月21日(金) 公開講座A 実施後反省会
5	9月25日(金)	① 各活動の進捗状況報告 ② 公開講座A 結果と評価
公開講座B 実行委員会	10月9日(金)	10月10日(土) 公開講座B 会場準備と打ち合わせ
公開講座B 実行委員会	10月10日(土)	10月10日(土) 公開講座B 実施後反省会
6	11月26日(木)	① 各活動の進捗状況報告 ② 物品購入について

編集委員会 (1)	12月1日(火)	① 投稿資格の確認
編集委員会 (2)	1月8日(金)	① 投稿状況報告と査読方針 ② 投稿規程の検討
編集委員会 (3)	2月10日(水)	① 査読結果の確認 ② 投稿規程の検討 ③ 論文集の編集方針について
7	2月10日(水)	① 各活動の進捗状況報告 ② 各係より活動報告 ③ 論文集投稿規程の検討 ④ 今年度の予算執行状況
編集委員会 (3)	2月17日(水)	① 再査読結果の確認 ② 投稿規程の検討
8	3月1日(火)	① 論文集投稿規程の検討 ② 年間活動総括 ③ 次年度への引き継ぎ事項等 ④ その他 次年度の会議日程

7 MSシートに沿った活動概要と評価

1) 研究 II-1 研究活動の活性化

1-1 各自の自主的な計画への取組の推進 プロジェクト研究助成基準の変更

「研究活動の活性化」については、①プロジェクト研究助成基準の変更、②プロジェクト研究件数の増加、③科学研究費申請のための研修会の実施の3点が2015年度の実施計画としてあげられた。

プロジェクト研究は、応募のあった研究計画に対して、「プロジェクト研究に関する取決め」に基づき審査し助成金を給付するものであり、今年度は5題のテーマを採択し、助成した。プロジェクト研究申請資格について、以前より個人や少人数で取り組む研究にも支援ができるようにしてほしいという要望があったため、今年度より個人(少人数)研究に対しても支援ができるようにプロジェクト研究助成金申請の取決めに、以下の内容を追加した。

個人(少人数)研究の構成メンバーについては以下に定める。

1. 個人研究の場合は、申請者が研究代表者として研究計画の遂行に関してすべての責任を持つ。
2. 少人数研究(2名以下での研究)の場合は、研究代表者は本学教員であること。共同研究者は、他施設の者でも可とする。

以上の変更により、応募者にとって、少人数でも気軽に応募できる基準となった。

また、2011年度より発足した「研究をともに学ぶ会」については、名称を変更し「研究交流会」とした。第1回は倫理委員会との共同企画で、日頃の教育活動を研究にする際の、倫理的配慮の最新情報を得ることができた。また、第2回では科研費獲得のための有用な情報を得る機会を設けることができた。さらに第3回、4回では研究・教育に有益な最新ツールについて、学内の教員間で活発に情報交換を行うことができた。

よって①と③は計画実施することができたが、②の件数増加については、昨年度に比較すると同数であり、特に大幅な増加には至らなかった。

2) 地域連携 III-3 公開講座の活性化

3-1 近隣住民対象の公開講座の実施と充実

「公開講座の活性化」については、継続的に実施している地域貢献活動として、地域の看護職への支援と地域住民への健康支援に関わる活動を今年度も実施した。

地域の看護職への支援は、地域の中規模病院に勤務する看護職の研究力向上をめざし、公開講座の開催および研究指導に取り組んでいるが、特に公開講座は、エクセルを用いた統計処理・分析の講座として2005年度から開催しており好評を得て毎年開催している。今年度は、超初級者のための講座としたため、受講者の満足度も高かった。エクセルの初級者編、中級者編、上級者編と段階的に企画して欲しいという意見も見られたため、次年度以降の計画につなげていく必要がある。

地域住民への健康支援としては、地域住民に向けた公開講座を開催した。ここ数年は、本学灰田学長を講師に「認知症予防」を中心テーマとして設定し実施してきた。今年度も同様に実施し、アンケート結果などから参加者の満足度も高く、地域住民の健康促進への活動として貢献できたと考える。

今後の課題としては、「研究活動の活性化」では、「研究会」を有効に活用し、教員各自の研究力を向上していくことを支援していくことがあげられる。また会の企画においては、臨地実習等の日程を考慮し、より多くの教員が参加できるよう調整を行うとともに、FD・SD委員会とも協力しながら、研究会がさらに研究活動を活性化させる場として活用されるよう企画したい。また、東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集は、本学教員の研究成果の発表の場であるが、例年4～5本の論文等で構成されている。今後はもっと活発に論文が投稿されることをめざしていく必要があると考え、今年度投稿規程の見直しを実施した。よって、次年度以降にはより多くの投稿が期待される。

「公開講座の活性化」においては、参加者からは公開講座のシリーズ化等を望む声もあるが、所員が運営の中心となる現行の方法では、マンパワー的に限界があるため、既存の授業公開など大学全体で取り組む公開講座のあり方を検討する必要がある。